

第1章 ルールの運用からみる盲人卓球

盲人卓球班

0. 障害者スポーツ——社会学の視点から——

わたしたちは、スポーツを楽しむ。そのスポーツの楽しみ方は、時に観戦であったり、時に直接にスポーツをすることであったりと様々である。私たちが普段に親しんでいるスポーツとは、野球・バスケットボール・水泳など健常者がするスポーツを目にすることがほとんどであろう。

オリンピックの後にパラリンピックが開催される。パラリンピックでの障害者がスポーツに取り組んでいる姿を見たことがあるだろう。障害者がするスポーツとは、健常者のするスポーツとは違うこともある。障害を考慮して、ルールや道具を健常者のするスポーツとは変化させたり、健常者のするスポーツをベースにした新しいスポーツがあるためである。

障害者スポーツについて簡単に説明する。障害者のするスポーツを障害者スポーツということは出来ない。なぜなら、障害者がスポーツをしたからといって、そのスポーツが障害者スポーツであるとは必ずしも言えないからである。詳しくは、第2節にて触れる。障害者スポーツは、ディサビリティ (disability)・スポーツともいわれる。ディサビリティとは、「身体的なインペアメントを持つ人のことを全くまたはほとんど考慮せず、したがって社会活動の主流から彼らを排除している今日の社会組織によって生み出された不利益または活動の制約」(長瀬[1999:15])である。つまり、障害者スポーツは、社会的認知が薄く、また障害者が主体となっていることから、スポーツをすることへの人々の理解が得られていないという現状を示し示す。

障害者スポーツとして、具体的にどのようなものがあるかということ、それは多種多様であるが、ゼミナールの他班が研究した車椅子バスケットボール、ろう者バレーボール、そして我が班の研究対象である盲人卓球を挙げることができる。前者2つについては、別に詳細に触れるので、ここでは触れない。盲人卓球について触れておく。盲人、つまり視覚障害者が卓球をベースに変化を加えたのが盲人卓球というスポーツである。

障害者スポーツといっても、身近なものとして感じることは難しいかもしれない。わたしたちはスポーツを楽しむ。健常者がスポーツを楽しむように障害者もスポーツを楽しむ。しかし、障害者スポーツならではの特徴を挙げることもできる。たとえば、障害者スポーツは大会設立の歴史をみると、その目的の主要部分がリハビリであった。なるほど、体の一部に障害を持つと、その他の体の部位まで影響を与えたり、障害が更に進行したりすることがある。その悪影響を防止する働きがリハビリにはある。リハビリをスポーツの中に取り入れることによって、楽しみながらリハビリをすることが可能になる。スポーツという形に変えることによって、障害者がリハビリに取り組む際に生じるストレスを多少は解消する。このような理由から、最初はリハビリを念頭において障害者スポーツがおこった。障害者スポーツの在り方は、変化をし続けている。今日では、従来のリハビリや福祉の視

点からばかりではなく、より楽しめる、あるいは競技性の高いスポーツをも目指して障害者スポーツは変化を続けている。

では、障害者スポーツが障害者にはどのような影響を与えているのか。個人レベルと社会レベルで見てみる。まず、個人レベルで見る。『第31回全国身体障害者スポーツ大会調査報告書』のデータ（藤田[1998:71]）をみる。すると、「図3-2 スポーツをやっていちばんよかったこと（側面別）」では、以下のようになっている。

図1 「スポーツをやっていちばんよかったこと（側面別）」

1 社会的メリット	36.8%	
2 スポーツ固有のメリット	23.8%	
3 精神的メリット	13.5%	
4 身体的メリット	13.3%	
5 その他	1.2%	計88.6% (元図は円グラフ)

最大のメリットとしてあげてある社会的メリットとは、具体的には「図3-1 スポーツをやっていちばんよかったこと」の項目から、「友人が増えた・スポーツ外外出増・周囲の理解」（藤田[1998:71]）があてはまる。ともすれば、障害者は障害を抱えるために、家や施設に閉じこもりがちである。人間とは、社会的動物である。だから、障害者はいろいろな人と接することで何よりの大きな喜びを得たといえることができる。次に2番目にあがったスポーツ固有のメリットについて分析する。具体的には、スポーツの上達などである。このメリットは、健常者がスポーツをやってよかったことにも上位に挙げると考えられるだろう。次に社会レベルで見る。障害者スポーツがさかんになると、障害者への社会的視点を高める。

障害者はどう捉えるのか。2つの立場がある。1つは、ノーマライゼーションやバリア・フリーの政策をとる政府の立場であり、もう1つは、障害を個性として捉える障害個性論の立場である。前者は、「社会を障害者が同化しやすい形にデザインしなおすこと」（石川[1999:71]）を行い、障害者にも優しい社会を目指す。一方後者は、前者の欠点を「障害者の同化にはおのずから限界がある」（石川[1999:71]）と指摘する。後者は、健常者がマジョリティとして、マイノリティとしての障害者を抑圧しているという理解図式と対になる。この理解図式のもっとも先鋭的立場にあるものとして、木村や市田のろう文化が当てはまるだろう。障害者が、「内なる健常者幻想」（倉本[1999:245]）を消し、障害に新たな価値を見出す。これが障害者へ同情ではないまなざしを取り戻すことでもある。

障害者スポーツに注目するのは、障害者スポーツが社会を変える大きな力を秘めていると考えるからである。

佐藤充宏によると、スポーツの持つ身体的意義は、次の3つに区分することができる。

図2 「スポーツの持つ身体的意義」

- 1 治療・リハビリテーション
 - 2 健康維持
 - 3 身体的表現・リラクゼーション
- 」（佐藤[1997:16]）

障害者スポーツはようやく、治療・リハビリテーションから脱却して、身体的表現・リラクゼーションに注目しはじめた。つまり、競技性の高いスポーツにも焦点を合わせる。この訓練から趣味のスポーツとしての流れは、障害者たるプレーヤーにとってのスポーツを楽しむ幅の広がりという意味する。趣味のスポーツは障害の克服のみを意味しない。野球大好き少年に肘を壊すほど、身体を痛めつけてまでも打ち込む自由があるように、障害者にも人生や身体をかけてスポーツをする自由が認められつつあるということを示す。福祉を越えたところで、スポーツをする自由を与えられるということである。しかしながら、現実には社会的認知が低いため、スポンサーがいなかったり、施設がないか不備だったり、健常者のボランティアの手が必要であったりと自立してスポーツを楽しむという地点には、まだまだ遠い。

おわりに、著者が障害者スポーツに取り組む理由を述べる。前述したように、障害者スポーツがよりよい社会に変えていく力を秘めているものであるということと関連している。すばらしい可能性を持っているにもかかわらず、障害者スポーツは社会的注目を得ていない。また、徐々に注目されつつはあるものの、福祉くさい・リハビリくさいものとして扱われるに過ぎない。これまでの障害者スポーツ研究では、大きく分けて2つの視点があった。福祉医療の視点からは、障害者スポーツがリハビリに役立つかという目的をめざすに過ぎない。スポーツ科学の視点からは、障害者にもスポーツの喜びを与えようという目的を目指すに過ぎない。この2つの視点では、第2節に詳細を示すが、障害者スポーツの捉え方として「①障害者がする ②障害者用にルールが変えられている ③障害の無意味化するルールが作られている」の3分類のうち、せいぜい①②を示すのみで、③を示さない。③を主張する立場から障害者スポーツを提示するには、社会学的手法がとりわけ有効であると判断した。障害者スポーツをもっと広い視野で見えていく。

それでは、この章では盲人卓球をルールが実際にどのように扱われているかを見ることで、盲人卓球とは何かを示す。

1. 構成的ルールに見る盲人卓球

球技において、通常、視覚は非常に重要な要素とされる。ボールを認知する場合、視覚を利用するからである。しかし視覚障害者の特徴として、特に視力の低いものは空間でボールをとらえることが困難である。そこで音がでるボールを利用して、視覚的認知（目で見て確かめること）の代わりに、音（聴覚）を利用して平面で行う競技が考えられた。盲人卓球はボールを転がし、ネットの下を通して打ち合うゲームで、卓球とは著しく異なる。盲人卓球の起源について『全国身体障害者スポーツ大会競技規則の解説』では以下のように述べている。

世界盲人百科事典によると、「栃木県足利盲学校長の沢田正好が視力障害者の神経の働きや身体の動きなど、感覚訓練の一つともなる盲人用ピンポンを創案し、1993年の帝国盲教育研究大会の際発表した、そのルールがだいたい現状のものに近

いものであったことからみて、沢田が盲人卓球の創案者であったかもしれない。」とその起源について記しているが、このゲームを誰が考案し、いつ頃から行われるようになったかは明確でない。(財団法人 日本身体障害者スポーツ協会(編) [1996:34])

盲人卓球は日本だけのものであり、今のところ日本でしか大会は開かれていない。そのことの一部は卓球とテーブルテニス (table tennis) の言葉の意味上の違いで説明できる。日本語でいう卓球とは「卓(台)の上で行う球技」という意味で卓球と呼ばれるのであり、ボールがはねている必要はない。テーブルテニスとは「テーブルの上で行うテニス」という意味で、ボールがはねるというテニスの性質を含んでいる。だから、盲人卓球は「盲人が行うテーブルテニス」ではなく「盲人が卓(台)の上で行う球技」という意味なのである。オーストラリアでは盲人卓球によく似た競技があるが、それは「スウィッシュ (SWISH)」(財団法人 日本身体障害者スポーツ協会編 [1996:35]) と呼ばれている。盲人卓球は、テーブルテニスの、いわゆる「ピンポン (ping-pong)」⁽¹⁾といわれるような要素は引き継いでいないが、テーブルテニスを「卓(台)の上でする球技」ととらえた日本で卓球を参考に盲人卓球が生まれたのである。実際、コート広さ、ラケットの形、ピン球の大きさや材質など卓球を引き継いでいる部分も多い。とはいえ、盲人卓球は競技の性質、楽しさなどが卓球とは全く違い、一つの新しいスポーツである。そしてそう捉えると、もはや競技者は盲人だけに限られるべきではない、ということを強調しておきたい。

盲人卓球は、音によるボールの認知という性質のため、そのルールも卓球と異なる部分が多い。注目すべき点は、それらのルールが、盲人卓球固有の戦術に結びついている点である。そして戦術こそがスポーツの楽しさと深く関係している。盲人卓球固有の戦術については第3節で具体的に述べる。盲人卓球のルールを、盲人卓球を構成しているという意味で「構成的ルール」と呼ぶ。盲人卓球固有の戦術を、構成的ルールに対応するものとして「選好ルール (preference rule)」と呼ぶ。選好ルールは、いわゆるセオリーのことである。たとえば野球において、一塁、二塁、三塁、ホームベースの順番で走らなければならない、決して三塁、二塁、一塁、ホームベースの順番で走ってはならないというルールは構成的ルールであり、フライが野手に捕球されると同時に、塁上の走者が次の塁に向かって走ってよいというタッチアップ (touch up) は選好ルールである。ガーフィンケル (Garfinkel) はその著書 (Garfinkel [1963]) の中で、「構成的期待 (constitutive expectancies)」という言葉を使用し、ルールに従うということがいかなることかを解説している。

構成的期待とは

- (1) プレーヤーの立場からすると、プレーのあり得る領域から1つのルールセットを枠づけるものであり、プレーヤーの願望や環境や計画や関心や……選択の結果に関わりなくプレーヤーがそれを選ぶと期待するものである。
- (2) プレーヤーは……選択肢の同一のセットが自分を拘束するのと同様にほかのプレーヤーも拘束することを期待する。
- (3) プレーヤーは、自分が上述のことを他者に期待するように、他者も自分にそのことを期待することを期待する。

この3つの特徴を構成的期待と呼ぶ。(Garfinkel [1963:190])

構成的期待を含んだルールのことを我々は構成的ルールと呼ぶ。盲人卓球が成立するためには構成的ルールは不可欠である。構成的ルールは、盲人卓球の競技規則で定められているすべてのルールであり、先に述べたようなコートの広さ、ピン球の大きさといった卓球を引き継いでいるルールも含んでいる。一方、選好ルールは、そのルールに従わなくても盲人卓球は成立するが、選ぶことが望ましいというルールである。以下、盲人卓球の構成的ルールをいくつか取り上げ説明する。

1つ目は、卓球台(写真1、2)についてである。ボールを転がして競技をする性質上、コートに継ぎ目があるとボールが正常に転がらないため、平坦かつ継ぎ目がない自他領コートを含めて一枚板と定められている。コートの寸法は卓球と同一の規格であり、ネットからエンドラインの距離は1メートル37センチ、自他領コートをあわせてもせいぜい3メートルである。音を頼りにボールを認知する盲人卓球においては、空間的に音を拾いやすい広さといえるだろう。エンドフレームのコート面と反対側の側面の中央には、小さな凹凸物がある。またセンターラインは手で触れるとわかるようになっている。プレーが始まる前のみそれらに触れることができ、台と自分の位置を確認できるようになっている。盲人卓球の台にはサイドフレーム、エンドフレーム(写真3)がついており、プレーヤーの打った球は、エンドフレームにあった後、一度コート内かプレーヤーの手に当たらなければアウトになる。もしエンドフレームに当たった球をすべてインにし、打った側の得点にしてしまえば、ゲームは非常に単調なものになってしまうだろう。インに上記のような制限を与えることで、ラリーが続くようにし、より深みのあるプレーを生み出すようにしている。

ネットは卓球と長さ以外同じ規格のものを上下逆さにして使用する。卓球ではネットの上を越すように打つが、盲人卓球では、ネットの下を転がすように打つ。ネットの下縁がコート上から4センチの高さになるように張る。盲人卓球では、先にも述べたように空間でのボールの認知が困難であるということと、音が非常に重要になるということで、浮き上がる球(=転がる音がしない球)はネットに引っかかるようにされている。サポートはボールの進行を妨げないように取り付けられている。

2つ目は、ラケットとボール(写真4)についてである。ラケットは卓球で使用するもの(市販されているラケット)と材質、形状、大きさは同じであり、そのラバーをとったものである。ペンとシェイクがあるが、盲人卓球ではコート上でボールを転がせる打ち方のため、ペンとシェイクによる握り方の差異はみられない。ボールは金属球が入ったプラスチック製のもので、転がると音がする。大きさと材質は卓球で使用するものと変わらない。

3つ目は、アイマスクの着用についてである。盲人卓球の対象者は、弱視の人、全盲の人であるが、どちらもアイマスクの着用が義務づけられている。試合が始まってから終わるまで審判の許可なしにアイマスクを外すことはできない。

4つ目は、サービスについてである。サーバーが「いきます」といってから5秒以内にレシーバーが「はい」と答え、そこから5秒以内にサーブをしなければならないというルールがある。卓球ではサーバーがサービスのモーションに入ることをレシーバーが目を確認し、自動的にプレーがスタートする。しかし盲人卓球においてはプレーが始まるという

ことを音声で確認しあわなければならない。

5つ目は反則についてである。ダブルヒットと呼ばれるような二度うちや、ホールディングと呼ばれる押し出すような打ち方は反則とされている。ホールディングの判定は難しく以下のように定められている。

(1) サービス時のホールディング

- ①打ち出す前にラケットとボールが触れ、その後、押し出すように打ち出した場合。
または、打ち出す前より、打ち出した後の方があきらかにラケットを振るスピードが速い場合。
- ②打ち出すときにラケットとコートの上にボールがはさまれ、そのまま押し出すように打ち出した場合。
- ③ボールを打ったときの打球音がしない場合。

(2) リターン時のホールディング

- ①打ち返す動作をおこす前にボールがラケットに触れ、その後、押し出すように打ち出した場合。
- ②打ち出すときにラケットとコートの上にボールがはさまれ、そのまま押し出すように打ち出した場合。
- ③身体の正面の範囲から離れたボールに対応したときなど、弧を描くようなスウィングで打ち、その結果、打球コースが大きく変わったような場合。
- ④ボールを打ったときの打球音がしない場合

(財団法人 日本身体障害者スポーツ協会(編)[1996:38-39])

ホールディングは本来、盲人卓球を公平に視覚障害者に楽しませるため、盲人卓球で重要な音を保護したと考えられる。しかし審判は聴覚的な判断に加え視覚的な判断によっても判定する。徳島大学の社会学特別講義『障害者スポーツと社会 — 盲人卓球の過去・現在① —』において、盲人卓球のプレーヤーである池田氏の指摘をまとめると「視覚障害者ではない審判が目で判断することと、審判が公的な資格ではなく経験に基づくものであることから、ホールディングの取り方が人によってバラバラであり、視覚障害者には不可視の領域で審判が正しいのかどうかさえ確かめられず、プレーヤーにとっては非常に不満なものだ。」(岡田・近藤・池田・樫田 [1998]) ということである。

写真1 「卓球台」

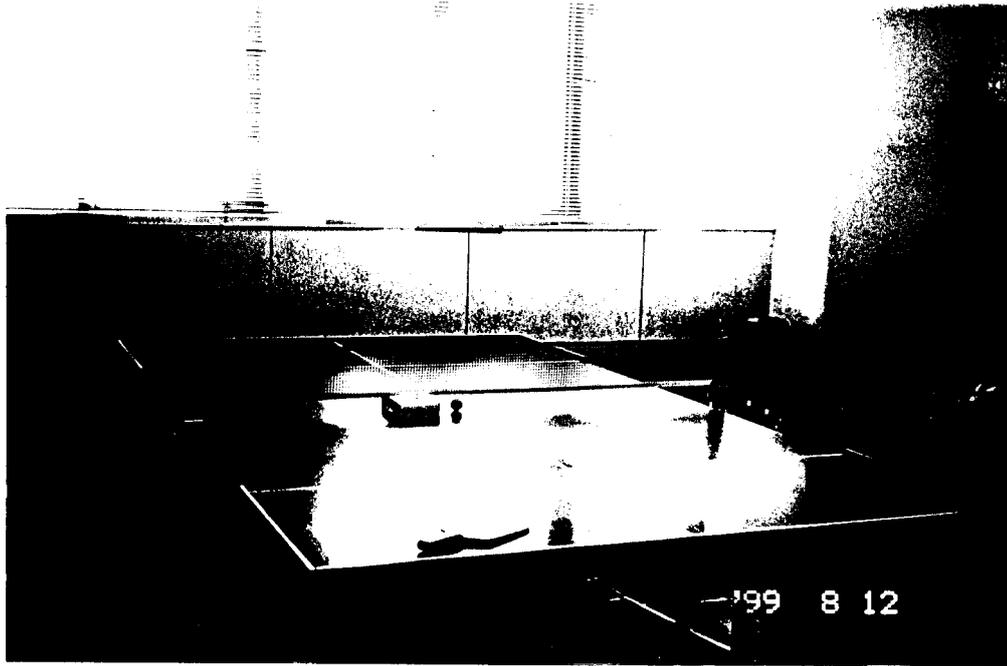


写真2 「一枚板の卓球台」

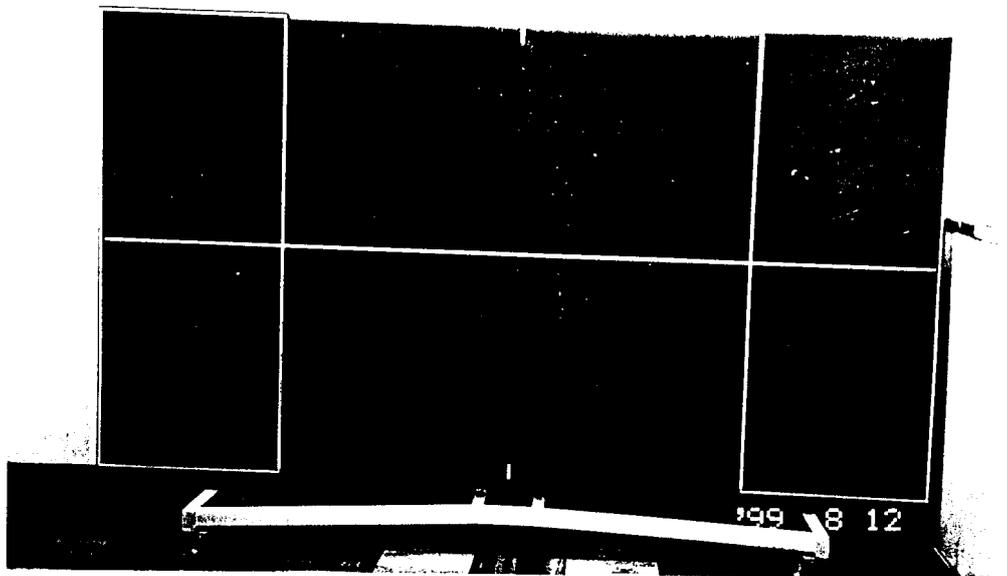


写真3「フレーム」

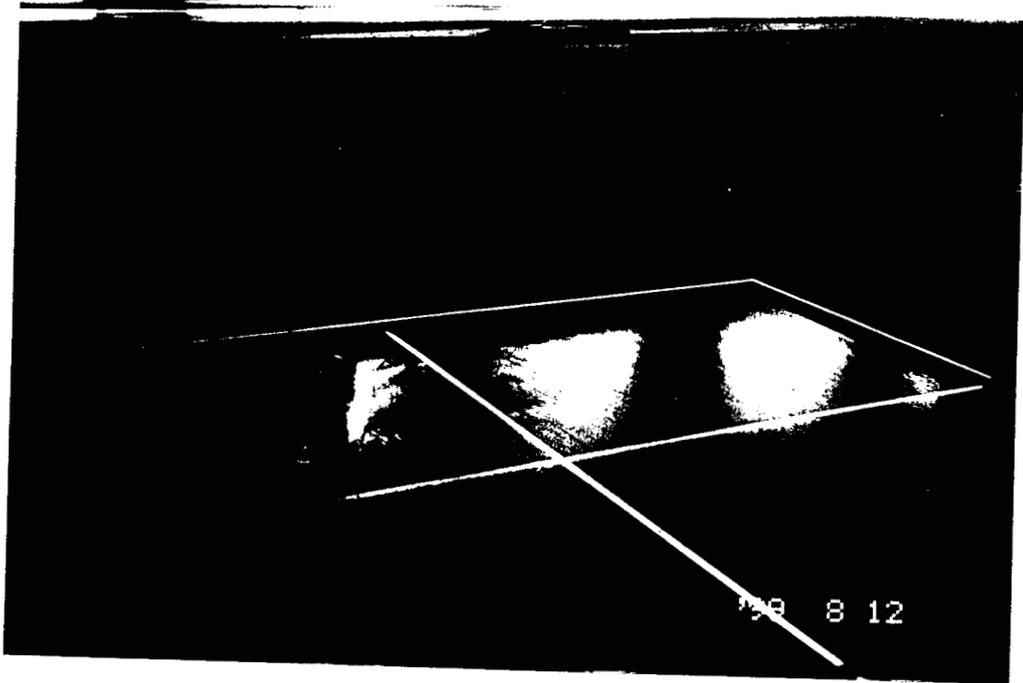
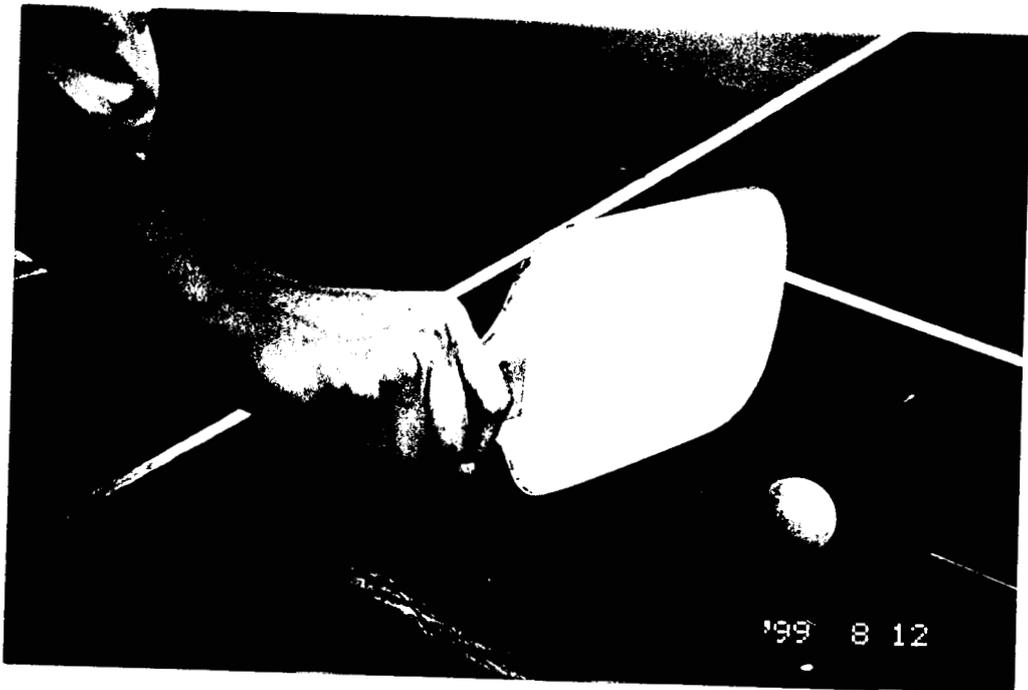


写真4「ラケット、球」



2. 障害者スポーツとは

我々の研究する障害者スポーツとは、一体何を指してそう言うのか。この問題を考えるにあたって我々は次の3つを志向する。

- ①障害者がするから
- ②障害者用にルールが変えられているスポーツのこと
- ③障害を無意味化するようなルールが作られているという意味で障害者スポーツである

おそらく現在の障害者スポーツは、①～③の混じり合ったものであると我々は考える。それでは、我々の対象とする盲人卓球において、実際に検討してみよう。

まず①の「障害者がするから『障害者スポーツ』である」という主張からだが、確かに盲人卓球の正規の試合は、「視覚障害者」のみを対象にしている。故に「障害者がする障害者スポーツ」という位置づけも可能である。しかしそう単純ではなく、盲人卓球は視覚障害者だけのスポーツであるわけではない。公式試合の参加資格が視覚障害者にしかないとはいえ、視覚障害者でなくてもプレーすることは可能である。「障害者がするから『障害者スポーツ』である」というなら、我々学生やその他の健常者、また視覚以外に障害を持つ人がアイマスクを着用し、盲人卓球のルールに則ってゲームを行った場合、そのプレーは盲人卓球ではないということになる。同じスポーツをしているのに何故名称が違うのか。もう一つ逆を考えてみよう。もしも、内臓に疾患を持つ人が卓球をしたら、それは内臓疾患卓球になるのだろうか。この論理でいくと、右腕切断の人が行う野球は右腕切断者野球になり、下半身麻痺の人が行うテニスは下半身麻痺テニスになる。極端な例を挙げれば、視覚に障害を持ち、更に内臓に疾患を持ち、左指切断の人がいたとすると、その人が何かスポーツをするたびに、それは内臓疾患左指切断盲人スポーツ、となるのである。

この指摘は、障害者スポーツと障害との結びつきをどのように考えるかという問題を浮上させる。先に例で挙げたように、「ある障害者がそのスポーツをするからこそ〇〇（障害者）スポーツである」とする帰結は、障害に固執しすぎており、スポーツの内容と関係ないところで名前が決まっているのである。それは、ある特定の部位における限定された障害に結びついた形で「障害者」を位置づけ、一方で、考えられ得るすべての「障害者の行為」を障害と結びつけて考える、という枠組みにとらわれている。スポーツで考えなくともよい。障害者が行う行為は全て「障害者の行為」になるのである。「障害者がするから」とはすなわちそういうことだ。そのような思考は我々の望むところではない。「障害者がするから」という理由では、障害者スポーツを語ることはできない。

次に②の「障害者用にルールが変えられているスポーツのこと」という考えだが、その基本は、健常者がやっているスポーツをそのまま障害者がやるのは、体力その他の要因からきつい。そこで障害者ができるように、ルールを変えて配慮をする、という含みである。これについては具体的な例を挙げて検討していきたい。さて、盲人卓球における障害者用のルールには、たとえば、「いきますーはい」のルールがある。サーバーの「いきます」、レシーバーの「はい」によって、初めてゲームがスタートする。一方卓球の場合では、サ

サーバーが何時サービスを行うのか、レシーバーが目で見確認し、自動的にプレーがスタートする、ということになっている。卓球でも盲人卓球でも「今からプレーに入る」という確認が為されているわけだが、卓球が視覚を用いて行っているのに対し、盲人卓球は音声による確認という手段をとる。それは目の見えない視覚障害者のためのルールである。ほかにも、本章第1節で紹介したように、サーブ時に中央線の確認をするための溝（突起物）に触れて良い、音で状況が判断できるように、ピン球に鉛の玉を3個入れるなどが、この分類にあたるだろう。しかしこの指摘は、後で述べるように、その意味を変えていくことになる。

③の「障害を無意味化するようなルールが作られている」というのはどうだろうか。盲人卓球における障害の無意味化とは、すなわち「アイマスクを使った視覚そのものの無意味化」である。全盲であれ弱視であれ、あるいは健常者であれ、みな一律にアイマスクの着用を義務づけることにより、視覚能力の違いは無意味なものとなる。確かに、実際の視る能力の程度、視覚を失った時機によって、盲人卓球のプレーにおける熟練のスピードや習熟度に差異が生じるという言葉はしばしば耳にした。たとえば、大柴の指摘の要旨を示すと、「生来目の見えない人は、確かに長く視覚を閉ざした経験から、視覚以外の諸感覚は非常に優れている。しかし、その運動経験が中途障害の人と決定的に異なっているのである。それゆえ、中途障害や、あるいは少しでも視力のある人の方が、結果的にその運動経験の広さによって早く上達していく」（岡田・大柴・檜田[1998]）ということであった。このように、一人一人のプレーヤーによる個人差は否めないのだが、しかし、いま、ここで盲人卓球をプレーするのに、彼らの間に差異など無いという前提こそが、問題となっている「無意味化」であろうと考える。

さて、ここで先程予告した②との関連を考察してみよう。我々は「いきますーはい」等々の例をあげ、それをもって「障害者用にルールが変えられている」ことの証明とした。しかし、盲人卓球はアイマスク着用のルールによって障害を無意味化するのである。無意味化された後に残るのはひとりのプレーヤー。つまり、この障害の無意味化がされた後では、「いきますーはい」や「溝を触る」などのルールは「障害者の為のルール」、すなわち②のような考えから「盲人卓球をする者の為のルール」へと変わるのである。この転換は「障害者がするから」「障害者のために」といった従来の発想に並んで、障害者スポーツ研究の面白さを飛躍させるものであると我々は考える。それは何故か。

考えてみてほしい。「障害者がするスポーツ」「障害者用にルールを易しくしている（配慮がある）スポーツ」をもって障害者スポーツとするのは、その発展性を著しく阻害した考え方になり得るのである。前述したように、「障害者がしているから」という位置づけは、正規の試合における「視覚障害者」以外のプレーヤーを除外し、またいたずらに「障害」を強調するだけのものである。一方、「障害者用にルールを易しくする」という発想は、障害者スポーツが持ちうる高度な競技性を始めから否定するおそれがある。なぜなら、この考えの根底には「障害者でもできるように」という障害者保護的発想が存在しているからである。ゆえに、「障害の無意味化」という第3の概念のもつ思考の広がりや、我々は興味深く感じるのである。

このように、盲人卓球はアイマスクによって障害の無意味化が為されたスポーツである。しかし完全に無意味化されていない部分がある。たとえば盲人卓球では、現在は必ず健常

者の審判を必要とする。それは、最終的にはアイマスクを着用したプレーヤーのみでは、正確な勝ち負けを判定できないためである。イン、アウトの判定は勿論、ホールディングの判定法もまた「視覚」の利用を必要とするものなので、完全な視覚能力の無意味化は為されていない。もしも、「健常者の」審判が必要であるといった障害・非障害の対カテゴリーをなくすとしたら、電気信号を利用したアウト、インなどの判定といった審判の手段が考えられるだろう。が、現在のところ、とりわけ健常者審判によるホールディングの判定の不公平性について、非常に問題を抱えている。この話については次節以下で述べることにしよう。

さて、ここまでどのように障害者スポーツを規定するのかという話をすすめてきたが、ここで、また別の角度から、今ひとつの分類を用いて障害者スポーツを語っていきたいと思う。我々は、障害者スポーツの在り方として、インテグレイティッドスポーツ(integrated Sports)、ニューミックス(new mix)、リバーズインテグレイション(reverse integration)という3つの関係を提示したい。簡単に説明すると、まず、インテグレイティッドスポーツとは、既存の健常者のスポーツに似せてつくられた障害者スポーツを指す。次に、2つ目のニューミックスとは、障害者と健常者が同時にプレーできるようなスポーツを表している。たとえば、テニスのニューミックスでは、車いすのプレーヤーと健常者とがペアとなり、健常者はワンバウンドで、車いすのプレーヤーはツーバウンドまで打ち返せる、というルールで一緒にプレーする形式がとられている。そして障害者スポーツに健常者スポーツが接近して作られるのが、リバーズインテグレイションである。(2) (下図参照)

図3 「インテグレイティッドスポーツ、ニューミックス、リバーズインテグレイション」

- (1) インテグレイティッドスポーツ：健常者のスポーツに似せて障害者スポーツがある
↓↑
(2) ニューミックス：障害者と健常者が同時にプレーできるスポーツ
↓↑
(3) リバーズインテグレイション：障害者スポーツに健常者スポーツが接近する

ここでまず、インテグレーション(integration)という言葉に注目してもらいたい。インテグレーション、統合、統合教育をそれぞれ辞書で引くと、以下のように解説されていた。

- ・インテグレーション「統合という意味であるが、普通、障害児教育で“統合教育”の意味で使われる。」(上田・大川(編)[1996:29])
- ・統合「(integration) ①多数の個々の機能が、1個のより高次の秩序のものに統合されること。②=インテグレーション。」(上田・大川(編)[1996:421])
- ・統合教育「(integrated education : mainstreaming) 心身障害児を普通学級で健常児とともに学習させ、必要に応じ特別の指導も行うこと。」(上田・大川(編)[1996:421])

しかし、実際に近年まで行われてきた「統合(教育)」には、ややもすると障害者の方に、より歩み寄りを求める傾向が存在していた。インテグレーションの本来の意味は一方から他方への方向性を持つものではない。しかし、インテグレーションが統合(教育)として、障害者を健常者に同化させようとしてきたという、社会的・時代的背景を背負うもの

であることを考慮すれば、インテグレーションという語は、やはり、方向性を帯びたものとして解されるべきであろう。それゆえ、リバースインテグレーションという逆説が成立するのである。同じ考えで、「統合」を表すには、インクルージョン(inclusion)が適切かと思う。インクルージョンの辞書的な意味は「包含、包括という意味であるが、障害児教育ではより深まったインテグレーションという意味に使われることがある」(上田・大川(編)[1996:27])というもので、社会的・時代的に同化の方向性を意味づけられたインテグレーションの変わりに、本来の意味における「統合」を表す語として使用できるだろう。

『21世紀を見据えた障害者スポーツの在り方』⁽⁹⁾において、障害者スポーツ在り方研究会は、「障害のある人とない人が一緒に行う(Integrated)スポーツ(車いすテニスのニューミックス、車いすダンス、盲人マラソンなど)や、障害のない人が車いすを利用してスポーツを行う場(reverse integration)もあることから、障害者スポーツもこうしたものをも含む大きな概念で捉える必要がある」(障害者スポーツ在り方研究会[1997:9])と言っている。しかし我々は、前述した考えから、インテグレイティッドスポーツとニューミックスを明確に区別する。我々の考えるニューミックスは、「障害者」と「健常者」という異なる位置づけをされたプレーヤーが、その各々の位置づけを生かしてプレーをする、新しいスポーツなのである。そして今ひとつのリバースインテグレイションは健常者スポーツを基盤としたスポーツではなく、ある障害者スポーツが存在し、それが逆に健常者スポーツに影響を及ぼしていくという方向性に沿って、更に障害者スポーツに今までと違った広がりをもたらす。盲人卓球はこのリバースインテグレイションの性質を備えているのである。盲人卓球はアイマスクによる障害の無意味化が為されており、「健常者スポーツを易しくしただけ」のものでは決してない。つまり盲人卓球においては、障害者・健常者に関わらず、全く同じルールのもとでプレーすることが出来るのである。

ところで、(1)のインテグレイティッドスポーツの考え方は前述した②「障害者用にルールを配慮したものにする」という発想に通じるものである。そしてまた、アダプテッド・スポーツ(adapted Sports)の考えと重なるものである。アダプテッド・スポーツとは、矢部によれば、「スポーツのルールや用具を障害の種類や程度に適合(adapt)させることによって、障害をもつ人は勿論のこと、幼児から高齢者、体力の低い人であってもスポーツに参加することが可能になる」(矢部[1997:2])という発想のもとに障害者スポーツの総称の1つとして提唱される。「競技に人間を合わせるのではなく、人間に合わせた競技を考え出すという発想で、障害の有無に関係なく、すべての人が参加できるスポーツ」(石塚[1997:398])というものだが、その目指すところは「社会的弱者に優しく」という領域に捕らわれているように思える。つまるところ「社会的弱者でも出来るように」ということなのである。社会的弱者が「ちょっとルールを変えてもらう」ことでしかスポーツに参加できないのなら、彼らは障害者スポーツの中でも「社会的弱者」としての性質を持ち続けねばならないことになる。そうではなく、障害者スポーツはもっと広い概念として提供できるのだ。障害者(あるいは社会的弱者)には、自分に合ったスポーツを選ぶ自由があり、勝敗や他者との比較・競争を超えたところでスポーツを楽しむ自由があるのである。それはアダプティッド・フィジカル・アクティビティ(adapted physical activity)の考えによって提唱される。アダプティッド・フィジカル・アクティビティとは「スポーツのル

ールや身体活動の方法を個人の身体的状況、あるいは知的な発達状況に応じて変容させる」(藤田[1999:286])もので、この意味ではアダプテッド・スポーツと変わらない。しかし「あくまで本人を尺度として、スポーツや身体活動に参加する他者との対峙は想定されず、価値も個人の中に想定される。スポーツする個人は、この意味で絶対的存在ということが出来る。近代スポーツの重要な構成要素である競争、勝敗、普遍的ルール、平等性は、アダプティッド・フィジカル・アクティビティにおいては、個人の絶対的存在の前にその地位を低下させざるをえない。」(藤田[1999:286])という、「絶対的存在としての個人」を前提とした障害者支援プログラムの可能性を示唆するものである。アダプテッド・スポーツが、競技性という近代スポーツの性格をまだ受け継いでいるのに対し、アダプティッド・フィジカル・アクティビティは、他者との競争や勝敗から離れてスポーツに取り組むという、新しい価値を提示する。その意味で、後者の方がより突き進んだ主張をしていると言えるだろう。

だが、それでも、アダプティッド・フィジカル・アクティビティのように、障害者スポーツにおいて完全に競技性への志向を捨て去ることは出来ないのである。障害者スポーツには2つの道が存在する。ひとつは、他者との競争、勝敗、比較ではなく、自分の中にある価値に従うという考え、もうひとつは、まさにその競争や勝敗の中でより高い競技性を追求していくという、近代スポーツの流れを汲む考えである。この2つは、それぞれに重要な価値の在り方なのだが、アダプティッド・フィジカル・アクティビティを主張すると、前者の価値しか認められないということになる。だが、我々はやはり、障害者スポーツには競技性への志向という道が存在すると考えるのである。個人に還元する価値とともに、スポーツに競争や勝利、他者との比較を求める価値も確かに存在するのだ。この問題を解決するにあたって、我々は今一度、障害の無意味化という概念に注目したい。なぜなら、障害が無意味化されたスポーツでは、まさに「無意味化」されたが故に、障害の程度(軽い・重い)や健常者との比較で苦痛を感じるものがなくなり、更にまた競技性を追求することも可能なのである。確かに、本当に重度の障害者を前にしたとき、無意味化が確実に機能するかという問題は残る。しかし、それでもなお障害の無意味化は、新たに「非障害者スポーツとしての障害者スポーツ」を創造する、きわめて意味のある提言なのである。

3. リズムスポーツと戦術

我々は、第1節において構成的ルールから盲人卓球を説明し、続く第2節で障害者スポーツという理論の枠組みから盲人卓球を検討してみた。そこで、この第3節では、我々が実際に参加し観察して得たデータに基づいて、盲人卓球を捉える。

盲人卓球は、平面でするスポーツである。つまり、浮くと負けである。だから、ホールディングやダブルヒットは反則になる。この節では、人々は盲人卓球を実際どのように楽しむかに焦点を当てる。なぜなら、スポーツにおいて人々を惹きつける、あるいは、人々に受け入れられる楽しさがなければ、スポーツとして成り立たないからである。スポーツの楽しさとは、たとえば競技性の高さが挙げられる。

盲人卓球の場合の楽しさとは、ルールには定められていない戦術に表れる。戦術とはす

なわち、選好ルールのことである。選好ルールとは、場面場面で当然とされる戦術をさす。いわゆる、セオリーである。プレーヤーに選好されるルールである。構成的ルールは守らないと試合とは呼べないが、それとは違って、選好ルールは守らなくとも試合は進む。

以下の戦術は、盲人卓球がリズムスポーツであるということと深く結びつく。リズムスポーツとは、次の2点を意味する。一点は、試合形式のスポーツで勝ち続ける／負け続ける、敵／自分のペースにのるといことがある。試合の流れをつかむとも言う。このリズムのことを指す。もう一点は、打ち合いの中で生じるリズムである。詳しく述べると、スピードの緩急を駆使し、サーバーからレシーバーへ、そしてサーバーへと返球するリズムである。

それでは、盲人卓球の戦術を以下に示す。リズムスポーツの分類にしたがって、戦術を2種類に分ける。まず、リズムスポーツの後者と結びつく戦術を示し、次にリズムスポーツの前者と結びつく戦術を示す。

1つ目の戦術は、コースを打ち抜かない⁽⁴⁾ということである。卓球との比較から、明らかにする。卓球では左右にコースを打ち分けて相手のバランスを崩していく。一方、盲人卓球では、コースを左右に打ち分けて相手のバランスを崩すのは、有効な戦術ではない。むしろ逆サイド（対角）のコースをねらうことは自滅することになる。もちろんプレーヤーはアイマスクをつけているためコースをねらうことは難しいということはある。しかし、盲人卓球になれた上手なプレーヤーであれば、コースをねらうことも可能である。なぜなら、盲人卓球は左右に動くスポーツではなく、反応に瞬時の移動が必要で時間をとられるわけではないからである。コースをねらうことが有効でない理由は、フレームの存在である。球はエンドフレームに当たった後コート内につかなければアウトになるというルールがあるため、ボールはフレームに対して垂直に当たらないとイン（セーフ）になりにくい。

大柴の指摘の要旨をしめす。「エンドフレームに垂直に球を当ててコートに返すことは、練習で重視して行う。欠点は相手に球筋を読まれやすいこと、長所はミスをしにくく、コートに出にくいことである。長所に重点が置かれ、この練習を採用した理由は、盲人卓球が相手のミスを誘って勝つスポーツだからである」（岡田・大柴・檜田[1998]）。

私たちが撮影したビデオには、アイマスクをつけたプレーヤー対アイマスクをつけない目の見えるプレーヤーの試合のシーンがあるが、目が見えるプレーヤーは、目が見えるあまりしばしばこのセオリーを無視し、コースをねらいアウトになっている。

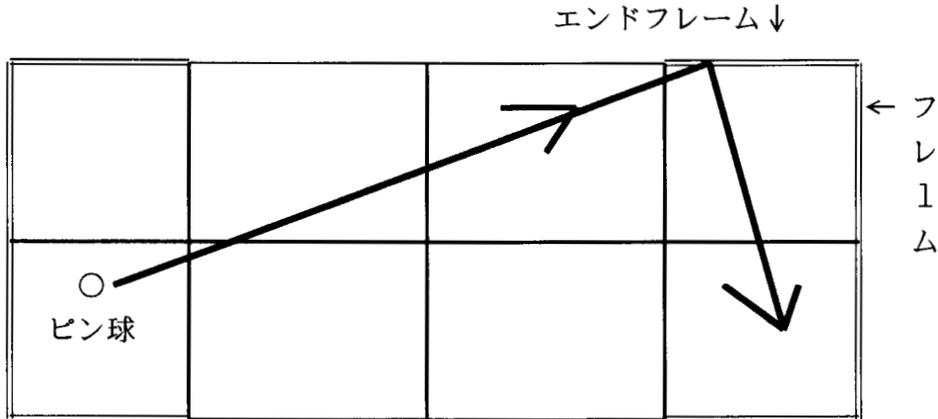
2つ目の戦術は、スピードに変化を付けることである。スピードに変化を付けることが有効であるという戦術は、卓球と同様に有効である。たとえば、3球ほど続けて強くうち、相手に強い球ばかり打つと誤推測させ、その隙を狙って、弱い球を打つ。しかし盲人卓球ではダブルヒット、ホールディングという反則があるため、きちんと一度で球を当てなければ反則をとられる。音だけを頼りに、レシーバーは球を打ち返す適切な場所を定める事は難しいため、この戦術がより有効になっている。

私たちが撮影したビデオにおいても、その証拠がある。アイマスクをつけたプレーヤー対アイマスクをつけない、目の見えるプレーヤーの試合では、後者は、前者とは違い、きちんとインパクトポイントを捉えている。また、前者はスピードの変化に弱いことが見て取れる。

3つ目の戦術は、サービスである。サービスで、コースをねらう。大柴の要旨を示す。

「サービスでサイドフレームの端に当て、右に寄ったレシーバーが左に変化する球についていけなくする」(岡田・大柴・樫田[1998])。コースを変えた球で、レシーバーに返球させなくする。

図4



4つ目の戦術は、「いきますーはい」による駆け引きである。「いきますーはい」のルールの説明をする。まず、サービスをする際、サーバーが静止したボールをラケットでうつ体制に構える。次に、サービス直前に「いきます」と声をかける。最後に、5秒以内にレシーバーが「はい」という。これは、基礎的条件と呼ぶことができる。なぜなら、視覚障害者にとって、この「いきますーはい」という声かけによって、相手の動向を知るからである。戦術として使用可能である。「いきます」から5秒以内になら、いつでも「はい」といいさえすればよいので、たとえば「いきます」から間をおいて返事をしてもいいし、直後に返事をしてもいいからである。それは、必ずしもレシーバーに有利な戦術とは言えない。わざと時間をおいて「いきます」と宣言したり、レシーバーがまだ始まらないだろうと高をくくっているような早いときにその虚をついて宣言することも可能だからである。また、レシーバーが「はい」と返事してから、サーバーがいつサーブをするのかも戦術である。このようにサーバーとレシーバー双方が戦術として使用可能である。また、池田の指摘を要旨で示すと、『サーバーが顔を一方の端によせて「いきます」といって、レシーバーに球のくる方向を誤って推測させておき、もう一方の端からサーバーがサービスをする』(岡田・近藤・池田・樫田[1998])という戦術がある。相手のリズムを崩すことが、戦術になる。

近藤の要旨を示すと、『「いきますーはい」の戦術は練習ではほとんど使わない』(岡田・近藤・池田・樫田[1998])。

以下の2つは、リズムスポーツの前者と結びつく戦術である。

1つは、ラケットに関することである。ラケットには卓球と明らかに違って、ラバーがないという点に注目する。ラケットにラバーがないのは、ピンポンの打球音をはっきりと出すためである。リズムスポーツとも結びつく。ラケットに関して、ルールには以下と定められる。

「1 ラケットは、材質・形状・大きさ・重量とも任意とする。ただし本体は木製で、かつ硬く平坦でなければならない。

- 2 バランスなどの関係から、指の当たる部分を加工することは差し支えないが、打球面の加工については認められない。
- 3 ラケットは、日本卓球ルールの細則（2，1，4）で規定する「JT TAA」のマークと、業者名が連続して刻印されているのか、商標がなければならない。
- 4 ラリー中、ラケットは1名につき1本限り使用するものとする。

（注）ラケットが破損した場合を除き、選手が任意に他のラケットを使用しようとする場合、審判員はその練習を認める必要はない。」

（全日本スルーネットピンポン協会（編）[不明:3]）

この規則を守りさえすればいい。後は、個人の手の大きさや好み、上達振りに合わせてよい。たとえば、ラケットの形には丸いものや四角いものがあるが、球を当てるだけなら、四角いものの方があたる確率は高くなる。

もう1つは、作戦タイムである。実際に、試合で導入されていない。大柴の指摘の要旨を示すと、「作戦タイムをとれば、プレーヤーの緊張や寂しさをほぐしたり、理性を取り戻す働きがあるばかりでなく、負け続けている試合を止める働きがある。アイマスクをつけていて見えないということは、目で得る情報が全くないということである。その状況で、プレーヤーが台との向きが平行でないのに気づかないのが原因で、連続して失点するときや、敵の癖をプレーヤーに助言すると、非常に有利になる。導入に当たって注意すべきなのは、プレーヤーに作戦タイム中といえどもアイマスクをはずさせないことである。なぜなら、スポーツは公平性を建前とするのに、アイマスクをはずして見ることができたなら、不公平になるからである」（岡田・近藤・池田・樫田[1998]）（岡田・大柴・樫田[1998]）。作戦タイムの導入で、2点の効用がある。一点は、より一層、試合を競技性の高い面白いものにすることができるということである。もう一点は、作戦タイムが盲人卓球だからこそ必要になる理由であるのだが、プレーヤーに視覚的認知をあたえるということである。

このように、盲人卓球は独自の戦術がある。だから、スポーツとしての楽しさを備えており、人々を惹きつけ、スポーツとして成立する。

4. おわりに

この研究で提示したことは、以下の三点である。

一つ目は、盲人卓球が、卓球とは異なり、盲人卓球として成立するという点を、固有の構成的ルールを持っているという点から明らかにした。

二つ目は、盲人卓球が、「非障害者スポーツとしての障害者スポーツ」という新しいスポーツの形を持つということである。つまり、「インテグレーション」という「健常者」と「障害者」の枠組みに結びついた、健常者への同化という意味にもなる概念とは一線を画した障害者スポーツのとらえ方を提示した、ということである。

三つ目は、盲人卓球が固有の戦術を持つことである。固有の戦術は人々を惹き付けるスポーツの楽しさに結びつくものであり、だからこそ盲人卓球はスポーツとしての発展性があるといえる。またスポーツとしての発展性があるからこそ、二つ目に示した「非障害者

スポーツとしての障害者スポーツ」の価値がある。

最後に、この研究に御協力を頂いた関係者に深く感謝する。特に、快く参与観察に応じてくれた徳島市盲人卓球クラブのみなさん、徳島市保健福祉部福祉事務所の田村茂美さん、貴重な助言を頂いた大柴豊先生（徳島県立盲学校）と、岡田光弘氏（筑波大学大学院）に深甚の感謝を申し上げる。

- (1) テーブルの上でボールがはねている擬音に基づく商標
- (2) この議論については以下の論文を参照した。
藤田[1998]、障害者スポーツ在り方研究会[1997]。
- (3) 障害者スポーツ在り方研究会が、財団法人日本身体障害者協会の委託を受けて、その報告をまとめたものである。
- (4) コースをねらうこともある。それは、手元をねらうことである。

<参考文献>

- 藤田 紀昭 1999 「スポーツと福祉社会 — スポーツをめぐる — 」 井上 俊・亀山 佳明（編） 1999 『スポーツ文化を学ぶ人のために』 世界思想社。
- 藤田 紀昭 1998 『ディサビリティ・スポーツ — ぼくたちの挑戦 — 』 東林出版社。
- Garfinkel, Harold 1963 “A Conception of, and Experiments with, “Trust” as a Condition of Stable Concerted Actions” ,Harvey, O.,J., (ed) *Motivation and Social Interaction* , New York Ronald Press :187-238.
- 石川 准 1999 「障害、テクノロジー、アイデンティティ」 石川 准・長瀬 修（編）『障害学への招待』, 明石書店：41 - 77。
- 石塚 和恵 1998 「身体障害者スポーツに理学療法士としてどうかかわるか」『理学療法ジャーナル』 32 - 6（特集身体障害者スポーツ）:393-398 医学書院。
- 檜田 美雄 1993 「協同的達成としてのパッシング — エスノメソドロジ的秩序理解の試み — 」 江原由美子（代表） 『微視的権力状況における会話分析』平成2~4年度 科学研究費補助金研究成果報告書：55 - 65。
- 倉本 智 1999 「異形のパラドックス——青い芝・ドッグレッグス・劇団態変——」 石川 准・長瀬 修（編） 『障害学への招待』 明石書店：219 - 255。
- 黒須 充・高橋 豪仁・藤田 紀昭 1996 『第31回全国身体障害者スポーツ大会調査報告書』。
- 木村 晴美・市田 泰弘 1996 「ろう文化宣言——言語的少数者としてのろう者——」 『現代思想臨時増刊号』 青土社：8 - 22。
- 長瀬 修 1999 「障害学に向けて」 石川 准・長瀬 修（編） 『障害学への招待』 明石書店：11 - 39。

- 岡田 光弘・近藤 美智子・池田 梅一 1998 『障害者スポーツと社会 — 盲人卓球の過去・現在 — 』
- 佐藤 充宏 1997 『僕らにスポーツ・僕らもスポーツ』 ベースマガジン社。
- 障害者スポーツ在り方研究会（財団法人日本身体障害者スポーツ協会） 1997 『21世紀を見据えた障害者スポーツの在り方』。
- 上田 敏・大川 弥生（編） 1996 『リハビリテーション医学大辞典』 医歯薬出版株式会社。
- 矢部 京之助 1997 「アダプテッド・スポーツと障害を持つ人の体力特性」『東海保健体育科学』19 :1 - 11 東海体育学会。
- 財団法人 日本身体障害者スポーツ協会 1996 『全国身体障害者スポーツ大会競技規則の解説』 財団法人 日本身体障害者スポーツ協会：34 - 42。
- 全日本スルーネットピンポン協会（編） 出版年不明 『スルーネットピンポン競技規則』 出版社不明 複写物（1999年8月2日徳島市福祉事務所盲人卓球世話人より入手。徳島大学の檜田 美雄研究室にて所蔵）。